

Title	身体部位を表す日・タイ語の慣用表現の対照研究 : 意味拡張の観点から
Author(s)	Saisomboon, Radaporn
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54325
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【17】

氏 名	サイソンブーン ラダポーン SAISOMBOON RADAPORN
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 23904 号
学 位 授 与 年 月 日	平成22年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	身体部位を表す日本語・タイ語の慣用表現の対照研究－意味拡張の観点から－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 春木 仁孝 (副査) 教 授 村岡 貴子 准教授 大森 文子

論文内容の要旨

本研究では、認知言語学の観点から身体部位詞を構成要素に持つ日本語およびタイ語の慣用表現の意味を分析することによって、日本語およびタイ語の比喩的な意味についての認知的なメカニズムがどのように共通しているのか、または、異なっているのかを比較・考察する。

第1章では、これまでの慣用表現研究の流れを概観し、慣用表現の対照研究においてどのような問題が扱われてきたかをみた。また、本研究の目的について述べ、本研究の構成の概略を示した。

第2章では、認知言語学において用いられる意味の拡張に関わる基本的概念（フレーム、メタファー、メトニミー、シネクドキー）を取り挙げ、その整理を行った。

第3章では、身体部位詞を構成要素に持つ日本語・タイ語の慣用表現を身体部位の語彙による意味拡張および表現全体での意味拡張の二つに分類した。また、それぞれの分類においてどのように慣用的な意味が成立するかに基づいて分類を行った。

第4章では、身体部位を表す日本語とタイ語の意味拡張に関わる認知プロセスについて詳細に分析した。なお、本章で扱われる身体部位を表す日・タイ語の慣用表現は、「口を出す」、「耳が早い」などのように、構成要素の意味が慣用的な意味の一部を担うものである。本章では、身体部位を表す日本語・タイ語は、慣用表現の中で以下の意味拡張の仕組みを経て意味を拡張させることで共通していることを論じた。

1. 身体部位の機能のフレームに基づくメトニミー
2. 身体部位の機能のフレームに基づくメタファー
3. 精神に関わる容器と内容物の隣接関係に基づくメトニミー
4. 身体における空間的な部分全体関係に基づくメトニミー

しかし、身体部位を表す両言語の意味拡張を考察したところ、両言語の意味拡張の相違点も明らかになった。タイ語の「húa (頭)」および「kháa (足)」の比喩的な意味は認知的な仕組みだけでなく、「頭は尊い身体部位である。足は卑俗な身体部位である」という、その身体部位に対する社会的な考え方も反映している。

タイの社会において、精神に関わるもう一つの重要な表現として「khwān (旋毛)」が挙げられる。「khwān (旋毛)」の比喩的な意味としては、<魂>、<精霊>、<善>という意味を表す。最も神聖な「khwān (旋毛)」は、頭に宿ると考えられている。タイでは、精神を表す「cai (心)」および「khwān (旋毛)」は仏教的に神聖なものであるため、神聖な場所として取り扱われる身体上部に存在すると考えられる。日本では、中国の伝統医学に基づいて、身体を中心(腹)に精神の働きがあると信じられている。そのため、「肝」は、伝統中国医学における五臓の一つとして、<勇氣>や<心の強さ>のような精神に深く関わっている。「腹」は精神活動として捉えられているが、自己保存の欲求に基づいた利己的な感情や思いなどと結びつく傾向がある。「thǎŋ (腹)」は、精神的な意味を持っていないが、「táp (肝)」および「sái (腸)」のような内臓は、<秘密・不正なもの・非道徳なもの>という意味を表す傾向がある。タイにおいて、「thǎŋ (腹)」は、身体の上部に位置していないため、聖なる場所として捉えられていない。そのため、「cai (心)」や「khwān (旋毛)」などのような、重要な精神が存在するところと考えられていない。つまり、タイ語の意味拡張は、空間の上下に深く影響されていると考えられる。

第五章では、第四章で分析したような意味拡張の仕方とは異なり、文法化の観点から、身体部位を表す両言語がどのような動機付けによってどのような領域に意味拡張されているのかを比較・考察した。まず、両言語で、身体部位詞から物体部分詞に拡張されている。物体部分詞への意味拡張の共通点は、(1)位置の類似性に基づく拡張、(2)形状の類似性に基づく拡張、(3)複数の類似性が絡んだ拡張の3つが挙げられる。また、物体部分詞への意味拡張の相違点は、言語主体の視点の違いや、焦点の当て方の違いなどが要因として挙げられる。

次の段階では、その物体部分詞は、メトニミーによって、物体部分詞の位置する空間もしくはそれに近接する空間を表している。空間を表す身体部位は、「húa (頭)」、「kôn (尻)」、「náa (顔)」、「lǎŋ (背)」である。「húa (頭)」は、空間への意味拡張において、身体部位の位置に基づくだけでなく、それぞれの国の文化的な基盤も関与している。例えば、「húa tó (テーブルの頭)」のように、「húa (頭)」は、(動物)の「頭」の

位置に基づく類似性によってテーブルの<先端>を表している。しかし、一方で、人間の「頭」の位置に基づく類似性および座の位置によって、社会的な地位が最も高い人の<空間>も表すと考えられる。また、「húa muang (町の頭)」の場合、タイの文化的な基盤により、<(首都支配の下で一番重要な地方の都市)>という意味を表す。このような意味拡張は、タイ語の「húa (頭)」の特徴であると考えられる。また、空間概念から時間概念への意味拡張においては、「náa (顔)」および「lǎŋ (背)」に見られる。タイ語における「時間」は、MOVING OBSERVER METAPHORに基づき、「前は<未来>であり、後ろは<過去>である」となる。この時間のモデルによって、タイ語の「náa (顔)」は<未来>を表し、タイ語の「lǎŋ (背)」は<過去>を表す。また、MOVING TIME METAPHORに基づき、<過去>は、認知主体の前にあり、<未来>は、認知主体の後ろにある。この時間のモデルでは、タイ語の「lǎŋ (背)」は、<未来>を表す。また、過去は、認知主体の前にあるが、「náa (顔)」を用いない。最後に、空間概念から「質」の概念への意味拡張においては、タイ語の「náa (顔)」は、身体性の基盤によって、<前方>を表す意味から<進展・進歩>という意味に拡張されている。一方、タイ語の「lǎŋ (背)」は、<後方>を表す意味から<後退>という意味に拡張されている。第五章では、第四章で示した、<身体部位の機能>や<行為のフレーム>に基づく意味拡張とは異なり、<身体部位>から<物体部分><空間><時間>などを表す文法的な要素へと拡張されている。言い換えれば、第五章で示した意味拡張は、文法化の起点となるものである。

第六章では、精神活動を表す日本語・タイ語の慣用表現を中心に考察した。両言語におけるメトニミー的な慣用表現は、<身体部位の状態変化によって、精神の状態変化を捉える>という因果関係のメトニミーに基づくものである。しかし、同じ精神状態を表すとしても、それぞれの言語で捉え方が異なる場合がある。

精神活動を表すメタファー的な慣用表現において、両言語では、身体部位は容器と内容物の隣接関係に基づくメトニミーによって、<精神>という意味に拡張される。身体部位は、THE BODY IS A CONTAINER FOR THE EMOTION という概念メタファーに基づき、精神を収容する容器としても捉えられる。<怒り>を表す場合、両言語とも身体の熱を基盤として、身体が<熱せられ続ける>容器として見立てられる。一方、<怒りの抑制・落ち着く>を表す場合、体温の低下を基盤として、身体が<冷やされる>容器として見立てられる。ただし、日本語では、生理的な観点から「頭」の温度を冷やすという表現となり、また、タイ語では、仏教の観点から「cai (心)」の温度を冷やすという表現となる。また、<悲しみ>や<心配>などを表す場合、日本語の「胸」およびタイ語の「cai (心)」が容器として捉えられる。<心配事や悲しみに胸が苦しくなる>を表すには、<内容物としての感情が詰まって通じなくなる>ことと見立てられる。また、<悲しみ>や<心配>などが抑制できない場合、両言語とも<内容物が増加して容器の限界を超え、容器が破損する>ことと見立てられる。一方、<幸せ>や<愉快>などのような感情を表すには、両言語とも<容器としての「胸」の中にある内容物としての感情がちょうどいっぱいになる量だけ収容される>ことと見立てられる。

<(恐れを伴う)驚き>を表す慣用表現においては、両言語とも、身体に<魂>が宿るという概念が前提とされる。たとえば、「肝を消す」や「sia khwān (旋毛を失う)」などのように、<魂>が身体に存在しないと、判断力などを失い、恐れ驚くと信じられている。これらの概念は両言語ともほぼ同様であるが、身体部位の使用が異なる。日本語の場合、中国伝統医学に影響されており、「肝」が<魂>として捉えられる。一方、タイ語の場合、宗教の影響により、「khwān (旋毛)」が<魂>として捉えられる。最後に、感情に対するプラス・マイナスの評価と慣用表現の要素に対するプラス・マイナスの評価においては、価値的な類似性が強く結び付けられる。

以上のように、身体部位を表す慣用表現の意味拡張によって、人間の行為や精神活動という日常生活において感心を持ちながらも、その内容を明確には示しにくいというものを、より明確な形式で捉え、表現することができる。また、身体部位詞は物体の部分と見立てられ、文法的な要素にまで発展している。両言語における、身体部位を表す慣用表現の意味拡張の方向性は、上記のように共通しているが、異なる方向に拡張することもある。これは「異なる視点」、「文化的な背景」などが要因になっていると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は身体部位詞を構成要素に持つ日本語とタイ語の慣用表現を認知言語学の立場から分析して、慣用表現の意味とその拡張のメカニズムを明らかにすることを目指した対照研究である。

従来の慣用表現に関する対照研究においては、形式上の対応の比較対照に終わっているものが多かったが、本研究は身体経験と文化的動機付けなども考慮した上で、メタファー、メトニミー、シネクドキー、文法化といった認知言語学の枠組みによって、身体部位詞から物体部分詞、物体部分詞から空間概念、空間概念から時間概念、あるいは空間概念から質へといった意味拡張のメカニズムを詳しく分析している。また分析の対象として主要な身体部位をほぼ網羅的にとりあげているため、日本語とタイ語における身体部位詞を用いた慣用表現の意味拡張についての全体像が明らかにされている。以上の点については審査員全員が高く評価するところであった。

試問においては、感情を表す慣用表現の分析においては、例えばどのような種類の喜びなのかによって身体経験は違ってくるので、感情をより細かく分けた上で比較対照する必要があるのではないか、あるいは「腹をたてる」という表現は表現全体で「怒り」を表しているのであり、「腹」＝「怒り」ではないので、身体部位が何を表しているかではなく、表現全体を考慮する必要がある場合も多いのではないか、研究の枠組みの説明の部分では提示されながらも実際の分析では十分に生かされていないものがあるのではないかなど、今後さらに研究を深めていく上で参考になると思われる意見なども出された。またタイ語の転写において声調の表示の仕方などに多少の問題点がある点なども指摘された。その他多少の改善すべき点はあるものの、本論文は認知言語学の枠組みに基づく日本語とタイ語の身体部位詞を用いた慣用表現に関する総合的な研究として、寄与するところは大きい。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと考えられる。